

2025年3月12日(水)、大学の会合でたまたま後輩が私に譲ってくれたチケットの舞台を観に行った。新宿、紀伊國屋サザンシアター、こまつ座、主演 風間俊介、「フロイスーその死、書き残さずー」という演劇である。「フロイス」とはルイス・フロイス。1532年ポルトガルのリスボンに生まれ、イエズス会の宣教師として1563年来日。織田信長や豊臣秀吉らと会見。戦国時代研究の貴重な資料となる『日本史』を記したことで有名な人物である。2011年のNHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」だったと記憶しているが、劇中に出てくるルイス・フロイスが記した『日本史』の原語(ポルトガル語)版が番組各回の最後に斡旋販売されていたことを思い出した。外国人の目から見た当時の日本社会を記した貴重な記録である。今でも販売されているのかネットで調べたが、NHKで紹介されていた豪華な表紙のものは確認できなかった。但しGoogle ブックスで原語版が販売されていることは確認できた。できれば豪華な表紙版を入手して読んでみたい。

話を舞台に戻す。ルイス・フロイス(以下、フロイス)はマカオを経て日本のとある漁港に上陸。その後貧困や為政者の弾圧に苦しむ庶民達に神の存在を説き、彼らの心労を和らげる。その後京都で織田信長に謁見、布教活動を許されるが、秀吉の世にバテレン追放令が出されて長崎に逃れる。並行して日本での体験を随時マカオの教会に報告していたが、1597年に長崎で起きた大規模なキリスト教迫害事件「26 聖人の殉教」の記録を最後に、その先フロイスがどうなったかは不明…、という内容だった。記録によると同1597年長崎で没したようであるが、墓はいまだ特定されていない。

という訳で、今回は私の出身地長崎に縁のあるフロイスとその布教にまつわる出来事、キリスト教徒弾圧、潜伏キリシタンについてウィキペディア等の資料から概要を学んでみたいと思う。

## 1. ルイス・フロイス

リスボンで生まれたフロイスは、1548年16歳でイエズス会に入会。インドのゴアで宣教師としての教育を受けていた頃、日本に布教活動に向かうフランシスコ・ザビエルと会っており、その影響あってか後に彼は日本に赴くことになる。フロイスは語学と文筆の才能を高く評価されており、ゴアでは各宣教地からの通信を扱う仕事に従事していた。

1563年フロイス31歳の年、肥前国彼杵郡の横瀬浦(現在の長崎県西海市北部の港)に上陸し、現在の大村市にある三城城の城主大村純忠のもと日本での布教活動を開始した。横瀬浦というのは、その2年前の1561年に当時外国の船が入っていた平戸(松浦氏の領土)で日本人によるポルトガル商人殺傷事件が起きた際、ポルトガル人は新しい港を探したが、これに応じて純忠が提供を申し出た港である。ポルトガル商人やイエズス会士が往来するようになると横瀬浦は大いに賑わった。

純忠はフロイスが横瀬浦に上陸した同じ年に宣教師から洗礼を受け、領民にもキリスト教を奨励した。しかし純忠がキリスト教へ傾倒するにつれ、領内では寺社の破壊、先祖の墓所の打ち壊し、僧侶や神官の殺害、キリスト教に改宗しない領民が殺害される或いは土地を追われるなどの事件が相次ぎ、家臣や領民の反発を招いた。

純忠は肥前の国の戦国大名有馬晴純の次男として1533年に誕生、母が大村氏の娘であったため1538年に母方の叔父大村純前の養子となり、1550年に家督を継いだ。一方この養子縁組の影響で純前の非嫡出子又八郎が武雄（佐賀県武雄市）の後藤氏に養子に出され、貴明と改名した。後藤貴明はこのことをよく思っていなかったであろう。純忠の行き過ぎたキリスト教奨励に不満を持つ大村家の家臣団と呼応し反乱を起こす。

フロイスは、純忠と後藤貴明の争いにより横瀬浦が破壊されたため平戸に近い度島（たくしま）に避難し暫くそこに滞在、その間同僚の修道士から日本語や日本の風習を学んだ。1565年に上洛の機会を得、京都で布教活動を始めたが、布教活動の保護を期待していた將軍・足利義輝が永禄の変で殺害されると摂津国・堺に避難。1569年、既存の仏教界のあり方に辟易していた織田信長と二条御所の建築現場で対面。フロイスはその信頼を獲得して畿内での布教を許可された。その著作において信長は異教徒ながら終始好意的に描かれている。フロイスの著作には『信長公記』などからうかがえない記述も多く、戦国期研究における重要な資料の一つになっている。

その後九州において布教活動をおこなっていたフロイスは、1580年来日した宣教師アレックスandro・ヴァリニャーノの視察に通訳として同行し、安土城で信長に謁見。1583年、宣教の第一線を離れ日本におけるイエズス会の活動の記録を残すことに専念するよう命じられたフロイスはその事業に精魂を傾け、傍ら全国をめぐって見聞を広めた。この記録が後に『日本史』とよばれることになる。

秀吉は当初信長の対イエズス会政策を継承したが、やがてキリシタン勢力が拡大すると、それに伴う仏教や神道への攻撃や、日本人の奴隷売買などに危機感を抱くようになり、1587年伴天連追放令を発令。フロイスは大村領長崎に落ち着く。1590年帰国する天正遣欧使節を伴って再来日したヴァリニャーノに同行し、聚楽第で豊臣秀吉と会見。1592年ヴァリニャーノとともに一時マカオへ渡ったが、1595年長崎に戻り、1597年『二十六聖人の殉教記録』を文筆活動の最後として、同年7月8日大村領長崎のコレジオ（神学校）にて65歳で人生を閉じている。フロイスは日本におけるキリスト教宣教の栄光と悲劇を直接目撃し、その貴重な記録を残すこととなった。

#### 著作「日本史」について

早くから文筆の才を注目されていたフロイスは日本についても多くの著作を残しており、特に有名なのは『日本史 (*Historia de Japam*)』である。この本の記述は1549年のサビエルの来日に始まり1593年で終わっている。当時の日本人とは異なった西洋のキリスト教徒としての視点から見た歴史上の事件の数々に関する記述は、重要な研究史料となっている。また、表音文字のアルファベットで書かれた書物のため、仮名や漢字だけでは不完全な、当時の人物や文物の発音なども読み取ることが出来ることから、中世期の日本語、

言語学、歴史言語学などの史料としても重要である。

## 2. 潜伏キリシタン

2018年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に指定された。禁教時代の長崎と天草地方において、既存の社会・宗教とも共生しつつ信仰を密かに継続した「潜伏キリシタン」の伝統を物語る稀有な物証として、潜伏キリシタンの文化的伝統が形成される契機となる原城跡、潜伏キリシタンが密かに信仰を維持するために様々な形態で他の宗教と共生を行った集落（平戸の聖地と集落・天草の崎津集落・外海の出津集落・外海の大野集落）、信仰組織を維持するために移住を行った離島部の集落（黒島の集落・野崎島の集落跡・頭ヶ島の集落・久賀島の集落・奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺））、潜伏キリシタンの伝統が終焉を迎える契機となった出来事が起こり、各地の潜伏キリシタン集落と関わった大浦天主堂が含まれる。

潜伏キリシタンと隠れキリシタン。混同されることが多いが双方にはそれぞれの定義がある。約250年（1612年～1865年）に渡る禁教期間、信徒は密かに信仰を続けていた。その間独自の信仰文化が育まれたが、キリスト教解禁後は多くの信者がカトリックへ復帰した。その信者たちを潜伏キリシタンと呼び、解禁後も独自の信仰文化を守った人々を隠れキリシタンと呼ぶ。隠れキリシタンは世代を重ねる毎に減少しており、2017年には推定400人程度と報告されている。

秀吉に次いで徳川家康もキリシタンを取り締まる方針を見せた。1612年には直轄領に対する禁教令、1614年には全国に対する禁教令が出された。これを受け全国の教会は閉鎖され、宣教師は長崎に集められたのちマカオおよびマニラに追放された。2代将軍秀忠の時代、禁教令はより厳格なものとなった。55名が火あぶり、斬首された1619年の「長崎の大殉教」、52名が火あぶりにされた1622年の「京都の大殉教」、50名が火あぶりにされた同1622年の「江戸の大殉教」など、殉教事件が相次いだ。禁教下日本においてイエズス会は中央から離れた東北から蝦夷地に進路を見出していたが弾圧を逃れることはできなかった。1635年、すべての日本人に対し仏教寺院の檀家となることが定められた。

1637年の島原・天草一揆はキリシタン主導の内乱とみなされ、「キリシタンは社会秩序を脅かす存在」との印象が広まる。1644年日本で活動した最後の神父である小西マンショが殉教し、以来日本では200年以上にわたり神父不在の時代が続いた。禁教下、キリシタンは信徒組織であるところのコンフラリア（ポルトガル語: Confraria、「組」「講」）を中心として潜伏した。こうした講は村落の共同体組織と重なりながら存在しており、司祭不在のなかでも信仰組織を維持することを可能とした。

この時代、キリシタンの存在は領主の為政上の責任であると理解され、各藩は幕府の圧力のもと、自領にキリシタンが存在しないことを確認する制度の構築を進めていった。その過程で多くの信者が摘発され死罪となり、或いは牢死した。特にキリシタンが多かった地域においては信者の摘発に絵踏が使われた。幕府は1659年に五人組の設置、1664年に各藩へ

の宗門改役（しゅうもんあらためやく）の設置を指示している。これ以降、1世紀近く大きな摘発は起こらなかったが、少なくとも大村領・外海においては信仰が続いていたようで、その後彼らの一部は五島列島などに移民し、そこでも信仰を続けた。

1854年の日米和親条約により鎖国が解かれた後、1858年に安政五カ国条約を通じて外国人居留者の信教の自由が保証されることとなり、1864年にはパリ外国宣教会の主導で長崎に大浦天主堂が建築された。翌年1865年3月17日、潜伏キリシタン10人ほどが教会を訪れ、そのうちの一人イサベリナ浜口ゆりが神父に信者である旨を告げた。「信徒発見」と呼ばれる出来事であり、その後長崎各地より潜伏キリシタンが天主堂を訪れるようになった。

このようにして長崎のキリシタンは信仰を公にするようになったが、信者に対する取り締まりはしばらく続き、信仰の自由が認められたのは1889年に大日本帝国憲法が制定されてからである。

明治期まで残った潜伏キリシタンの大部分は長崎県に集中しており、県下の隠れキリシタン信仰には「生月・平戸系」と「外海・浦上系」の2系統が存在する。では潜伏期の信仰とはどのようなものであったか。今に残る風習を覗いてみよう。

2017年時点で隠れキリシタンの組織的信仰が残っているのは、平戸に隣接する生月島および外海地方の一部、五島列島の若松町深浦のみであり、生月島の組は、2025年時点で1組（2軒で継続）を除いて解散している。ただし組織自体が解散したのちも、個人で年中行事にあたってオラショを唱える者などは存在するようだ。オラショとは潜伏キリシタンが唱えてきた独特な祈りの歌であり、ラテン語と日本語が混ざった歌詞になっている。恐らく信者たちはラテン語部分の意味について理解しないまま歌い継いでいるものと思われる。基本的にいずれの地区においても「神を守り、行事を執行する役」「洗礼を受ける役」「行事準備・信仰補佐および連絡・会計係」の三役を備える。

生月島には2000年時点で年間40回以上の行事を行う地域があった。形式は一定しており、儀礼の目的を口上したうえで御前様と呼ばれる御神体に供え物をしてオラショを唱える「祈願」、供え物のお下がりを食べる「直会」、二の膳を供え、参会者にも同じものをふるまう「宴会」の3部構成となっている。日程は節季を基準として定められる。カトリックの灰の水曜日にあたる「悲しみの入り」、クリスマスに相当する「御誕生」などが中心的な行事であったが、いずれもその意味は変化しており、「御誕生」は安産祈願の日とも考えられていた。また、カトリックに直接由来しない、水・虫害・耕作牛などに関する祭りもある。なお灰の水曜日とは、信者が復活祭（イースター）までの46日にわたって懺悔と内省を行う四旬節の初日にあたる日で、キリストが洗礼を受けた後、神から精神性と誘惑に耐える力を試されたとされる40日間にちなんでいる。

外海・浦上系は日繰帳にもとづく生活規律の遵守を信仰の軸としている。祝い事や法事は日繰帳に記される「よか日」におこない、一方で「悪か日」あるいは「ゼジュン」とよばれる日には禁忌を守る必要があった。「悲しみの46日間」および「御誕生」から後の13日間、毎週水・金・土曜日には肉や卵を食べることが禁じられたほか、祝日・日曜日には針仕事・釘打ち・肥いない（下肥を天秤棒で運ぶこと）・性交などが禁じられた。年中行事は少なく、

正月、春の「悲しみ上がり」、6月 - 7月の「夏祭り」、年末の「御誕生」程度である。

その他、人生儀礼として生月・平戸で「お授け」、外海・五島で「角欠き」などによばれる洗礼の儀式がある。この際、ヘコ子〈洗礼を授かる子供〉には洗礼名が与えられるが、生月では実親の名前を、外海・五島では抱き親の名前を用いる。葬儀は生月・平戸では「戻し」、外海・五島では「送り」とよばれた。生月島では遺体を聖水で清めるといったキリシタン式の葬儀が仏式の儀礼と同時におこなわれる一方、外海・天草といった半仏教色の強かった地域では仏教形式の葬儀を行った後、経文の効果を打ち消す「経消し」の儀式がおこなわれた。葬儀には当初寝棺を採用していたが、これが禁教時代にキリシタン確認の目印となったことから、ほとんどの場所では座棺にとってかわった。また、生月・外海・五島・天草などでは死後一定期間を経た命日にオラショを唱える風習があった。

10年ほど前になるが、平戸を経由して生月島の最北端の大バエ灯台まで家族と両親を連れて車をとばした。その帰り、平戸島の道を走っていたときお囃子のような笛の音が聞こえてきた。その方向へ坂を上っていくと赤レンガ造りに白い漆喰で縁どられたいかにも隠れキリシタン風の教会が眼前に現れた。地域の人が数人集まっており、カメラマンのような人がドローンを飛ばして何かしている。暫く待ってみたがお囃子の集団が全く近づいて来る気配がなかったので、我々はその場を去ったが、あれも何かの年中行事だったのかもしれない。現在まで潜伏期の風習が残っていることに不思議な感覚を覚えると同時にそれらがいつまでも続いて欲しいと強く思う。機会を見つけて世界文化遺産に登録されている教会群をゆっくり巡ってみたいと考えている。

#### 【引用文出典・参考文書】

ウィキペディア、文化庁「文化遺産オンライン」、長崎県庁HP、